あい、し、てる

羽柴悠貴

星雲と、空と、星あかりと、さみしさに、紐づけられた、肉体は、アンドロメダの雲に堕ちていって、空が生えていくことには、まったく意味などないのに、あなたの空が生えていくことは、ぼくの空が溶けていくことでもあって、海に溶けていったぼくの空は、くらやみに堕ちて、まるで性愛のような、合一ではなく、海と空はただのひとつの藍であって、ありもしない膜に惑わされたあなたも、ただ溶けていく、それが墮落と恍惚というもので、生えゆく空は、ぼくに振り向いてくれるものではないのです。

ぼくはぼくではない、空に溶けゆくぼくは、たしかなあなた、わけられるまえの、刹那にしか生きていない、すくなくともそう逢った、在った、あった。ぼ、ぼ、ぼ、ぼ、と、空をめざすあわは、くらやみからにげて、ひかりをめざして、あわのみなもとは、海に還ろうとしていて、それは海底にひかりがあることを、わたしだけが知っているからであって、海を空にしてしまおうと、溶けていく、ひとつになってしまった、おはようときよならであって、

いち、に、さん、溶けていったあなたを、あたらしく、つくる、ぽつ、ぽつ、ぽつ、ぽつ、からだに、溶かしていく、そんな毎日です、そうして、あなたをたべて、そうして、生き還ることを、どうか許してください、さい、あい、い。

あい、まい、みー、すいこみ、はきだす、けむりのさきに、おとがなる、
ぼ、ぽつ、ぼ、ぽつ、空に、溶けて、そこ、そこに、底に、